法学部創立五○周年記念講演

人間・社会・環境－法学・政治学の可能性をめぐって－

排除と生存をめぐって

釜ヶ崎の可能性を考える

栗原 彬

法学部創立五○周年ということですが、一九六四年六月に発行された『法学周辺』第八号に宮沢俊義さんが『差別』という論文を寄せていました。これは言うまでもなくキング牧師に率いられたアメリカの公民権運動を背景にした論文です。草創期の法学部がどこに関心を持っていなか、それが現在までどのように引き継がれているかということが見られる上で起点に立つ論文だと思います。やはり社会的な排除、その現実に目をとめる。社会科学は法学であろとそこに立って、そこから研究を始める。それが法学部の五〇年を通じての一つの姿勢だと思います。

その意味では、淡路さんの報告された環境の問題と併せて、社会的な排除の問題とその場所に立ち上がる生存ということが、そういうところに一つの現実がありますので、そこに焦点を据えてお話したいと思います。
社会的排除と生存のエッジ

社会的排除とそれに伴って生じてくる生存への欲求、そうした問題群を孕んでいる現場をエッジという言葉で呼ぼうと思います。エッジとは先端とか切っ先という意味です。市民社会の中の問題群がある現場です。それは排除と生存をめぐる危機的な現場であるわけですが、同時に、そういう受難の底から立ち上がってくるものがあいま

エッジは近代社会に限らず前近代社会からあります。共同体であるところには常にエッジが生じると言えるでしょう。その意味では、被差別部落、あるいは人種、性、宗教、病気、障害等々は前々からあるカテゴリーでございます。これらの社会的排除は新しい形式を通してもしごと補強されているところがあります。ですから、「公害問題は終わらない」と言うのと同じように、「社会的排除あるいは差別は終わらない」ということが言えます。

たとえば「文化の違い」という名によって人種主義がまかり通っているし、性的「間接差別」があります。雇用の際に隠れた性差別が現に進行している。それに加えて、ある能力において採用をするという建前で、そこでは観られずある問題は、地球市場化という問題と労働の再編成。日本で言えば労働者派遣法以来の

除去と生存をめぐって（栗原 榎）
問題です。そうした労働市場の再編成、自己調整的な自由市場への新自由主義的なコンセンサスが重なり合って、私たちがいま現に当面しているように、労働者所得が分断されている。労働者所得も縮減している中で、エリート層の高程率、困窮貧困な変大、らかすで本本DCE困貧家親のさ高の率困専門家暮らし、新しい回上き上回っています。ひとり親家庭の貧困率は、OECD平均では三○％です。日本は五九％ですから、大変な貧困率の高さと言えるわけです。

ここで貧困と言われているのに目を見失いたい。日本政府が初めて発表したデータがあります。二○○九年一月二日月に長妻昭生労働大臣が発表した、日本の相対的な貧困率です。これと東京都で四番目に高い位置にあります。つまり、日本の全国の相対的な貧困率は一五・七％です。これはOECD加盟国三○カ国の中央値の半分に届かないと考えています。ひとえの耐力を有するおおきい政力に目を向けものは、高齢者の貧困率が二一％、ひとり親家庭の貧困率が二四％、高齢者の貧困率が二一％、ひとり親家庭の貧困率が五九％、すべてOECD平均を大きく上回っています。ひとり親家庭の貧困率は、OECD平均では三○％です。日本は五九％ですから、大変な貧困率の高さと言えるわけです。
ここから一つは政策課題の問題が出てくると思います。それから運動の課題、そして個人が負わないでならばならない課題、三つのレベルを考えられる。私は個人が負わないでならばならないこと、これは、相対的な貧困率を引き下げるとという問題です。

たとえば数値目標を定めることになると思います。これは、大きな課題として考えたといえるでしょう。ゼロ成長の下で何かやっていかなければならない大きな課題になるわけです。これをめぐって詳しくお話しする余裕はありませんが、再分配政策は欠かせないことが、やはり政策課題の中に絡んで出きます。

中期的な課題としては、そもそも日本の貧困率が高い理由は所得の再分配機能が他のOECD諸国に比べて弱い、ということがあります。そうすると、所得の再分配機能を高めることが必要になります。これもさまざまなことがいくつかあります。たとえばナショナルミミマをしっかりと押さえていく、低所得層の暮らしの重点的な回復を考えていく必要があります。それはたとえば全労働者に雇用率を適用すること、バートの賃金を引き上げること、増税、ワークシェイアリングといったことが考えられます。

そうした問題に加えてもう一つ大きなのは、企業、とりわけ大企業の持っている、私は支えて全体主義的な企業が平気でまかり通っているのはおかしい。そういったことが中期的な課題の中にやはり含まれてきるだろうと思います。

政策課題にもまして重要なのは、運動の問題であります。市民社会内部の排除という新しい問題とそれに対応する
その運動の形を考えなくてはいけないだろうと思います。その時、釜ヶ崎で現に進行していることがとても覚え

そうすると、つながりの貧困に対して、言ってみればつながりの運動、つながりの政治、市民政治の次元で言え

立教法学 第78号（2010）
排除と生存をめぐって（栗原 彬）

「溜め」と「目標」

政策課題、運動の課題に対してはいかければ、湯浅誠さんの言葉で、「溜め」が必要である。当事者の課題、このように考えると、事態にと

人たちはどのようなことが必要かと言えば、湯浅誠さんの言葉で、「溜め」が必要である。当事者の課題、このように考えると、当事者にと

手近な条件を用いた手取り、ブリコラージュとして、一つは重層的排除や生きにくさを解

ばつながりのポリテックスが必要に含まれています。これからの社会運動は、アイデンティティ立脚型ではない。ア

イデンティティ立脚型は、言い方を変えればタコツボ型の運動ということになります。そうではなくて各分野の運

動がつながりで横断的にエッジの問題と取り組む。そういうステージにいまま踏み出す必要が出てきています。そ

ういう見方で言うと、水俣のもの、いわゆる運動、患者たちが市民たちと連携するということが出ています。石

丸兼道さんの原作の「排除と生存」の水俣奉納上演で、チッソに協力で取り組みを呼び掛けた。緒方正人の言

い方だと、課題課題の能「排除と生存」の水俣奉納上演で、チッソに協力で取り組みを呼び掛けた。緒方正人の言

が「排除と生存」の水俣奉納上演で、チッソに協力で取り組みを呼び掛けた。緒方正人の言

うという横つながりの姿勢が生まれてくる。そうすると、加害被害という二極図式を超えて、人と人として奉納上演に取り組む

と二極図式と考えることが可能で裁判などではもちろん必要になります。しかし、今はそうではなくて、もうチッソも

人として肩を並べていく。そうすると、加害被害という二極図式を超えて、人と人として奉納上演に取り組む

うという横つながりの姿勢が生まれてくる。そうすると、加害被害という二極図式を超えて、人と人として奉納上演に取り組む

の場にいずれかがよく表れている。そのことを話しながら行っていきたいと思います。

釜ヶ崎の場合にもそれがよく表れている。そのことを話しながら行っていきたいと思います。

ア

波新書、二〇〇八年。手近な条件を用いた手取り、ブリコラージュとして、一つは重層的排除や生きにくさを解

きほぐす、生の形を作り直すことを通してそれが実践されていく。その際に支援される者、支援する者双方とも、
アマルティア・センの言う文だと、生活の潜在能力が稼動する。湯浅さんはそれを個人の「溜め」と呼ぶ。そうい
て必要です。
しかし、「溜め」だけではダメだろうと思います。「目地」という言葉は未だ使いますが、「目地」とは建築用語
dです。木と木の組み合わせ部分で、そこに遊びがある。余裕がある。そうでないとき建物は成り立たないのです。た
えば引き出しを考えたとき、引き出しの枠があります。余裕、遊びが必要です。その遊びの部分を「目地」とい
う言い方をします。

この「目地」、自然や他者との関係、協働性、遊び、つながり、ライフネット等々が必要になる。とりわけ
人間と人間との間の「目地」が必要になります。

湯浅誠さんの言い方ですと、「目地」と「目地」が必要になります。そして引き出しがあります。その遊びの部分を「目地」とい
う視点を持って釜ヶ崎の可能性を見てみたいと思います。

まず、釜ヶ崎は小字の釜ヶ崎から始まっています。明治末期の木賃宿の発祥地です。東人船町、現在の住居表示
で言えば荻の茶屋一丁目に相当しますが、そこに住んでいた日雇い労働者や住民、支援者たちは釜ヶ崎と呼びま
す。あとは西成という言い方があります。大阪市が一九六六年に同和地区として線引きした時にあいりん
る地区という言葉を使ってあいりん地域という言い方をします。これは全く奇妙な使用法だと思います。学者たちはあ
いりん地区という言葉をちょっと替えてあいりん地域という言い方をします。これは全く奇妙な使用法だと思います。学者たちはあいりん地区という言葉をちょっと替えてあいりん地域という言い方をします。これは全く奇妙な使用法だと思います。
釜ヶ崎、異交通の可能性

このように釜ヶ崎で、釜ヶ崎の可能性を考えるという時、第一に挙げたいのは「もう一つの交通」です。私は交通のあり方として単交通、反交通、異交通という区別をしている。反交通は交通断ることです。異交通は相互的な交通です。同一のコードあるいは文化を共有している者同士のコミュニケーションです。双交通は多数派のコードを強化することに終わります。異交通というもう一つの交通では、コードが異なる同士がコミュニケーションする。場合によっては、言葉だけでなく身体、身振りといったことも含めての交通になります。ここに一つの新しい形が考えられます。釜ヶ崎のまち再生フォーラムというフォーラムが一九九九年に生まれています。ここに一つの新しい形が考えられます。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっています。釜ヶ崎のまち再生フォーラムで異交通の場所になっている人が、毎月第四火曜日という日を設定して、釜ヶ崎のまち再生フォーラムが一九九九年に生まれています。ここに一つの新しい形が考えられます。
交通は多少とも脱アイデンティティを伴うので排除のない新しいつながりを生み出します。たとえば労働組合と簡易宿所は本当の水と油のように敵対していたわけですが、フォーラムの狙いは、現に日雇い労働者が野宿をしています。フォーラムの役場は、釜ヶ崎駐在会議・ヒトコの理念を生じていく、街づくりをしていくということにつなげていくという発想です。ですから、野宿者の救済はそれはそう生じていく。そういう発想をとることができるのです。

このフォーラムは元々は釜ヶ崎居住問題懇談会が発起点に立っていきます。釜ヶ崎に対する緊急対策と、それを街を再構築する形で街づくりはまた別という今までの発想と違うやり方です。釜ヶ崎を救済することが即街づくりにつながっていく。このフォーラムは元々は釜ケ崎駐在会議・ヒトコの理念が事務局になって、釜ケ崎のまち再生フォーラムを設立します。それを一〇年間やってきました。

その間に、「居住の段階論」という図を作り上げることができる（ありふれた宿「棟み処」としての釜ヶ崎のまちづくり）日本ボランティア学会誌「〇〇七年度」日本ボランティア学会、二〇〇八年六月。また逆に、このような図を作ることで街づくりの一つの方向性が、野宿者の救済とセットになって展開されて見えてくるわけです。下からいくと、野宿からシェルターへと上がっていく。シェルターというのは本当にひとりひとの生活がいかに狭い空間の中にたた無機的に広がっているのです。ですから、そこでひたすら寝るしかない、二段ベッドがすっごく狭い空間の中にあると、それは自立支援センターがあり、厚生施設があり、簡易宿泊所がある。それ以降、福祉アパート、サポーティブハウス、マンションへと階段を上っていくようにする。サポーティブハウス
ウスは、ホームレスを受け入れるケア付きハウジングであると言えると思います。これに入るために保証人も要らないし、保証金も要らない。しかも二十四時間のケア付きであるという手厚いものですが、このサポートデイブハウスができただお陰で、その前後の階段が整っていく形になりました。居住を確保するということはすごく重要です。そのことによって生活保護を受けることができました。そのようにしてここに住む人たちの生活改善が著しく進行したわけです。

釜ヶ崎のまち再生フォーラム自体が一つの異交通の場所ですが、実際に、居住の階段論が進行し、それに伴って、同時に異交通の場所を確保しようとするいくつかのグループ、NPO法人が生まれました。たとえばコールームは土田假奈代さんという詩人が主宰するNPOです。カウンセラーセンターも同じで、その人たちがそこで話しできるような場所を作っていくことになりました。

ビル・ゲイツの言葉を引用します。「反応速度が生きを分ける。このような言葉で考えるのだったら、釜ヶ崎の場合は逆に応答のゆっくりした時間こそが生きを分けると言ったらいでしょう。そもそも応答があるかないかです。反応速度の問題ではありません。異なる他者の呼びかけへの応答、つまり異交通が必要で、新しいつながりを生み出します。」

・イヴァニ・イリチの道具のスペクトルはよく知られていますが、片方にホームを成り立たせる極があり、他方の極には地球市場と言ったらいでしょうか。その間の道具の配列をスペクトルとして考える（イヴァニ・イリチ）ホームのは身体性に富んでいるものの、手で使えるようなものです。鉛筆、絵の具、電話、自転車など。コーヒーショップ、散歩道、公園、パソコンといったものもホームの側です。地球市場の側には、多国籍企業、金融资本、原
立教法学 第78号（2010）

発、ゲノム計画、バイオテクノロジー、核体制といったものが配置されます。釜ヶ崎の異交通を支えるのは、や}

つなぐアート

第二の可能性はアートです。アートは世界を見、世界を映す、世界をつなぐと言えると思います。他者の呼び掛}

けに応答すること、自分の存在を表現すること、人と人、人と世界をつなぐことです。

平均年齢が八五歳、元々は野宿をしていた人たちが「むすび」という紙芝居劇団を作ります。紙芝居劇と言っ}

て、紙芝居に合わせて自分たちも劇的な所作をするのですが、最新作は「ねこちゃんの人生スゴロク」です。

ぷんちゃんという女の子とねこちゃん 二人は仲良しなのですが、ねこちゃんが迷子になってしまう。ぷんちゃ

ンを見失う。出会ったさまざまな動物たちに尋ねながらぷんちゃんを探す旅が紙芝居で描かれています。

最初に紙芝居と出会う。紙芝居はぷんちゃんの居所を直接教えないで「歩き続けるといいよ」と言う。いろ熱

の動物たちと出会うと「ねこちゃん、屋根の上に乗るといいよ」と教えてくれる。

この紙芝居はなかなか意味が深いと思います。これはソムリエ論の構図で見ることができます。一田崎真也のサ
生命に直接的な公共性

第三に公共性という問題があります。新しい公共性、「もう一つの公共性」と言ったらいいと思います。一九三六年スペイン生まれの聖母昇天修道会シスターのマリア・カラレサさんが決したのが、自生の小銭で自分の勤めの場を洗濯した。「忙しいことがあった」というと、同じく路上で暮らす男たちと話し合った。それは、少し慣れれた小銭で自分の事業を洗濯した。他に、男は使い道を考えます。夜が明けた時、男は酒とたばこと食料を手に、同じく路上で暮らす男たちと会った。 beans

排除と生存をめぐって（栗原 柚）
マリアさんが夜回りで食料を配りながら街を歩く。野宿している人たちに食べ物を置いていく。リヤカーを停め
てその上で寝ている人がいた。マリアさんはその人を起こさないよう、そっとおにぎりを置いて立ち去った。しば
らしくて同じ場所を通り掛かった、男は目を覚ませていた。「さっきここにおにぎりを置いた」と言うと、「そんな
ものはなかった」と男は答ええた。「では、次に配る時は見えないようににしておく」とマリアさんが言った。「そこ
から食べたら、それていじらないか。」

市民社会の所有権前提の公共性の次元では、これは盜みになるわけでしょう。しかしそうではないのです。共
性のハビトゥス（慣習行動）がそこにあると言っていると思います。

裁判官が現地視察に訪れた時、農民と漁民が次のように言ったといいます。総合型社会で電力よりもっと大切な公共性ではないのか、と。つまり、北海道電力は電力は的確性という、文明化・近代化に結びつく公共性を提供することの大切な公共性ではないのか、と言った。公益と公論と公的な決定、三つの要素を含んで
いる公共性の次元の中で言えば、もう一つの公益です。

さらに時間を見れれば、長尾らの名前が出てきます。淡路さんが先ほど足尾地域の滅亡した山松村の写真を出し
てくださいましたが、古河市営銅山は足尾銅山経営に際して、鋼を精錬する時の燃料に立ち木を売りました。また煙
害で山には全く立ち木がなくなってしまった。渡良瀬川の大洪水を起こすと、明治二十三年八月に大洪水が起こ
る足利、佐野地方の稲が腐り、桑もまた枯死、魚も全く減ってしまいます。これは足尾銅山による鉱毒ではない
排除と生存をめぐって（栗原 彬）

共生への社会科学

排除と生存をめぐって釜ヶ崎の可能性に迫る。それは大きく三つぐらいい分かれる思いです。受難者や被害者自身が社会科学を持
ち、アートを持つ。たとえば川本輝夫さん、水保病者ですが、ボロポロになるくらい六法全書を読み込んで、水保

病闘争をリードした人です。女島の漁師で水保病者の総力正人さんが、絶望感を抱き続けた人です。

それからボランティア、市民活動、NPOは水保病者の絶望正人さんが、絶望感を抱き続けた人です。湯浅さんは、水保病者のアートを起こしてきた播磨昌夫さんを思い出しています。社会のエッジに立つ社会

稲葉さんは東大の教養学部を出ていて、水保病者が東大の政治学の大学院で学んだ人です。彼女は、自分がやって来たことは生涯を通じてボランティアであること、陰謀者のアートを起こしてきた播磨昌夫さんを思い出しています。社会のエッジに立つ社会

科学とアート、このような広がりが出てきています。学園の中でも、たとえば金ヶ崎へ行くと、実際に金ヶ崎の市民活動に学生たちが入り込んでボランティアでやってています。そういった意味でのソーシャル・アクション、あるいは

私は釜ヶ崎のコルールの職員で原田麻以さんという明治学院大学を卒業して一年目の人と一緒に夜回りをしま
した。路上で段ボールに閉まれて野宿をしている人におむすびたちょうとしたおかずと飲み物を添えた袋を差し出
すのですが、彼女の後ろから私がその袋を持ってついていったわけです。そうすると、彼女は腰を低めるのです。

つまり、上からあげるよくある姿勢だと、受け取るほうの身になるとすごくつらいものがあるわけでしょう。同じ

私が袋を渡すのですが、その時袋を渡しながら私は思わず「ありがとう」と言いました。それでは「夜回りに来ました、おもむきはいかがですか」と言うのです。普通はもちろん「ありがとう」と言うのです。彼女は思わず「ありがとうございます」と言ってしまいます。これはどういうことなのかと後で考えましたが、思わず出てしまった言葉です。
原田麻さんの姿勢がその言葉を引き出したのです。ものを野宿している人に差し上げるということが、彼女にとっては苦しい。それを踏み越えて差し上げる時の姿勢です。これは昔からある歓待と贈与の形です。
作家の五木寛之さんから聞いた話ですが、白山から京都の街に冬場に下りてきて、門付けといって、商店の門口に立つ。黙って立っていると、商店主がお金を包んで、商店主のほうが「ありがとう」と言って、白山から来た人に渡す。これが門付けの原則です。もらったほうは「ありがとう」と言っています。こういうことが釜ヶ崎で進行しています。
時間になりました。でも「ありがとうございます」（拍手）